嫌がらせの年齢

――高齢者文学人生論

丹羽文雄 (1904-2005)
『嫌がらせの年齢』（1947）「改造」
『仏にひかれて わが心の形成史』(1971)「読売新聞社」
参考：本田桂子『父・丹羽文雄　介護の日々』(1997)
本田桂子『娘から父・丹羽文雄へ贈る朗らか介護』

宗教の観念が人間を捉えるには、或る程度の年齢の限度があるらしい

『嫌がらせの年齢』とは何歳か。丹羽文雄の小説でいえば。主人公うめ女は八十六歳である。一人娘に先立たれ、三人の孫たちの厄介者として嫌がられながら生きているうちに、嫌がらせの年齢になってしまったのだ。

彼女は三十二歳のとき、つれあいに死別し、以後五十三年間未亡人生活を続けている。法華教をとなえながら、四十年配の夫の写真に香華を立てることを忘れなかったが、火事で写真が焼け、消滅してしまうと、写真のことも、法華教も何もかもいっぺんに忘れた人になった。

「宗教の観念が人を捉えるには、或る程度の年齢の限度があるらしい」と作者は書いている。「人間は、遺憾なことに、この限度を越えても、なお生きる力を持っている」。

この小説を書いたときの丹羽文雄は四十三歳の男盛りで、その後、文芸家協会の理事長や文芸美術国民健康保険組合の初代理事長を務め、文化勲章も受賞した。「ひとわれを非情の作家と呼ぶ」ともいったが、河野多恵子、吉村昭、津村節子、瀬戸内寂聴など後進作家を育てている。衆目の見るところ、功成り名とげた作家である。

酒は飲まず、ゴルフはシングルの腕前の健康優良作家。まさか自分が八十一歳でアルツハイマーを発病するとは思っていなかったのではないか。

嫌がらせの年齢 ―――― 高齢者文学人生論

娘の本田桂子も最初は信じられなかった。彼女にとって父は理想の男性である。背が高く、ハンサムで、何を着てもダンディーで、かっこよく。寡黙ではあるが、口を開けば、しゃれた言葉で機知に富んだ会話を楽しむ――その父とアルツハイマーとはどうしても結びつかない。

父に続いて母もボケた。父はアルツハイマー、母はまだらボケ――娘はたまったものではない。しかし、これ以上悪くなることはあっても、よくなることはないと冷静に判断し、前向きに取りくんでいこうと心を決めた。

すると、そのうち、「桂子さん。そんなに楽しそうに老人介護をしている人はいませんよ」と瀬戸内寂聴に言われた。そして、寂聴のすすめにより。婦人公論（一九九六年九月号）に発表したのが『父・丹羽文雄　介護の日々』だ。

小説のようなフィクションではない。正直にありのままをぶつけてみようと書いた手記である。素直に、何にでも感謝し、仏さまのようになったと娘がいうアルツハイマーの父は、「男は年を取るとだんだん好々爺になっていく」という父の自伝小説『仏にひかれて』のことばと一致する。

しかし、父が身をもって人間の業というものを衆生に教え、百歳で大往生をとげる前に娘は六十五歳で心臓虚血により先だってしまった。

古里は　菜の花もあり　父の顔　　丹羽文雄